



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

特別増刊号

第 532 回 初めて明かす、「誕生の奇跡」

2013.7.4

昭和 26 年(1951 年)、7 月 4 日、私は埼玉県深谷市に生を受けた。

10 月生まれの予定が 7 か月の早産だった。

真夏の太陽がコウコウと照らす、蒸し暑い正午過ぎ、

誰もが意図しない、突然の誕生だった。

1,000g 足らずの未熟児は、当時の医療技術では生きる可能性の方が少なかったようだ。

田舎の深谷には、今のようなNICUの保育器もない。

未熟児網膜症になる可能性もあり、必死の子育てが始まった。

初めての男の子ということで、私の名前は当初、「賢一」だった。

ところが我家専属の神主が…

「賢一は御隠れになった、ここにいるのは、新しい生を受けた『賢二』である、ならば生きるべし！」と言ったかどうか、

とにかく長男でありながら、二番目の子として生まれてきた。

奇跡の誕生劇である。

父母の、必死の育児はその後も永遠と続く。

即座に東京大学病院に入院、そこは特異体質の乳児・児童ばかりいる、

一種の実験室のようなところだった。

片端(今では差別用語)の集まりを目の前に、愕然とした両親は、それでも一縷の望みに全身全霊をかけ、我が子の生を信じ、育児との格闘が始まった。

十分な保健制度がない時代、高額な医療費を捻出するため、父は死に物狂いで働いた。

母は、東大病院につきっきりとなり、小さ過ぎて既製品のない衣類を手作りで作った。

おしめはもちろん、着衣、靴下に至るすべてのものだ。

やっとできた衣類を身につけさせると、もう、サイズが合わなくて、また作り直し。

それでも、何回も何回も作り直した。

母は泣いた、嬉しくてうれしくて、泣いた。

それは、明らかに成長を示す、実感だったから。

ベッドに寝ることができない幼子を、我胸に抱きつつ、昼夜、地獄の看病の日々が続いた。

それから約 2 年、何とか東大病院を退院した。

虚弱体質の児童はやがて幼稚園、小学校と進んだ。
柔道の「町道場」へ通い、体を徐々に作っていった。
転地療養のため、夏は千葉県富浦で過ごした。
時がたち、元気で闊達な中学生がいた。

そして今がある。
62年前になかったかもしれない「生」が、今、ここにある。
今、私がここにいるのも、両親や、多くの人達の支えがあったからだ。

感謝の思いは、生涯かけて止むことはない。

2013.7.4
飯島 賢二